

やました

山下りん

明治初期の宗教画家 笠間市



(白凜居提供)

安政4年(1857) - 昭和14年(1939)。笠間生まれ。明治5年(1872)、画業を志し家出、上京するが連れ戻される。翌年再び上京し、浮世絵、日本画、洋画を学ぶ。明治10年(1877)、工部美術学校(日本初の国立美術学校。)に入学。同11年(1878)、ハリストス正教会の洗礼を受ける。同13年(1880)10月、工部美術学校退学。12月に横浜港から出航しロシアに留学、聖画を学ぶ。同16年(1883)帰国。女子神学校内宿舎に聖像画家として暮らし、全国のハリストス正教の教会のために聖画を描き続ける。大正7年(1918)、故郷の笠間に帰る。白内障を患ったためもあり、帰郷後は一切制作はせず、自然を友とした生活を送る。

山下りんは、安政4年(1857)、笠間藩士の長女として笠間に生まれました。7歳の時に父が亡くなり、生活はとても苦しいものでしたが、勉強に励み、大好きな絵を描いていたといわれています。

15歳になった頃、そろそろ嫁に出さなければという話を家の人が行っているのを聞き、(このままここにいたら嫁に出されてしまう。私は絵をもっと勉強したいのだ。)と、家出をしました。結局、この時は家に連れ戻されましたが、なんとか母や兄などを説得して、翌年再び東京へ行き、浮世絵師や日本画家の家に住み込みの弟子として、伝統的な日本絵画を学び始めたのです。しかし、弟子とは名ばかりで、実際は掃除や炊事洗濯といった家の仕事を手伝わされる毎日が続きました。

そのような時、明治政府が工部美術学校を創ることになりました。明治10年(1877)、りんは見事に入学試験に合格します。そして、うちわに絵を描く内職で生活費を稼いだりしながら、一生懸命西洋の絵画を勉強しました。

そのころ、りんは同級生の友達に影響を受け、ロシア〔ハリストス〕正教に入信します。その教会にはロシアからやってきたニコライ神父という人がいました。彼はロシア正教を広めるため、日本各地に教会を建てようとしていました。教会の聖堂には、キリストや聖人の聖像画<イコン>が必要です。ニコライ神父は日本人の中から誰かをロシアへ送り、きちんとした決まりに基づいたイコンを学ばせ、その絵を描ける人材を養成しようと考えていました。

そして選ばれたのがりんだったのです。若い女性が一人で言葉も良く分からない外国へ行くなどとても勇気のいることでした。

(ロシアへ行けば、西洋の絵画を学ぶ事ができる。)



イコン画(白凜居蔵)

りんは迷いましたが、絵を学びたいという強い気持ちから、留学する事にしました。

明治13年(1880)12月12日、横浜港から出港したりんは、サンクトペテルブルグの女子修道院に入り、そこで来る日も来る日も伝統的なイコンの勉強を続けましたが、そのうちにエルミタージュ美術館にも通うようになります。イコンと違い、遠近法のあ
る、表情豊かなイタリア絵画は魅力的で、りんはイタリア絵画の模写に熱中します。そのためイコンの勉強がおろそかになったように思われ、修道院から美術館への出入りを禁止されてしまいました。

明治16年(1883)に帰国したりんは、ニコライ神父から東京神田のハリストス正教会の敷地の中にアトリエを与えられ、本格的にイコンを描く仕事に入りました。

りんは、その後20数年間も描き続けますが、イコンは原則として、作者の名前を書くことが許されず、制作年月日も書かれていないものが多かったため、誰の作品かわかっていませんでした。しかし現在では研究が進み、りんの作品とわかったイコンは数百点にのぼっています。

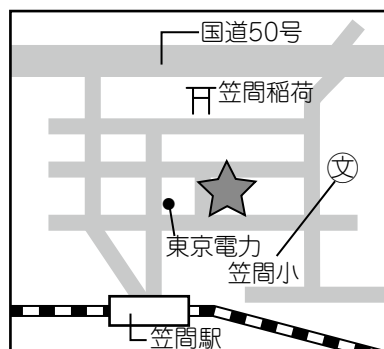
北海道の函館をはじめ、各地のハリストス正教会などに残されているりんの作品は、手本となったロシアのイコンとは異なり、温かみがあり、どこか日本的な目鼻立ちに描かれています。厳粛な宗教絵画を描く約束事の中で、りんは精一杯自分の個性を表現しようとし、自己の芸術を確立していったといえるでしょう。

ゆがりのスポットに行ってみよう

はくりんきよ
白凜居

所在地 笠間市笠間 1510

内 容 山下りんの弟の敷地に建てられ、りんの遺品などを展示しています。



おもな
参考文献

『山下りん』(小田秀夫・日動出版・1977)

『20世紀茨城の群像』(茨城新聞社・1999)